

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0471200311		
法人名	有限会社 クラスタ		
事業所名	グループホームあんど	ユニット名	まちな
所在地	宮城県登米市迫町佐沼字大網229-3		
自己評価作成日	平成 25年 10月 20日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://yell.hello-net.info/kouhyou/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成25年11月20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「介護は人である」との運営者の思いで、職員の人柄に重きを置いて人材育成に取り組んできた。開設から12年目を迎え、最後までその人らしくを大切にし暖かく思いやりのある介護を実践するために努力している。また、地域にとって必要な事業所となれるよう広報誌などを通じ活動内容を発信したり地域の方が集う「夕涼み会」や避難訓練などを定期的に開催し、事業内容だけでなく職員、利用者とも関わりを深めてきた。まだまだ地域の方の力をお借りすることの方が多けれどお互いに支え合える関係になれるよう努めていきたい。またそのことが認知症に対する理解を深め、認知症になってもあたりまえに暮らしていける社会の礎になると考える。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「グループホーム あんど」は、合同庁舎などが近くにあり迫町の中心に位置している。事業所の理念「一人ひとりがその人らしく、家族や地域とつながりを持ち、楽しい食事にあんどする」を掲げ実践している。管理者は看護師の経験を活かし、当初から「必要な介護と留意事項」を作成し、意思疎通の方法や介護方法・自立状況を把握し、入居者への自立支援を率先して行っている。12年目を迎え入居者の介護度も進む中で、職員育成の充実、医療面の充実を図り看取りの経験を活かして「今の思いに応えること」に視点を置き悔いのないケアに努めている。事業所が「安堵の場」であり続ける為に管理者、職員は一体となり取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 あんど)「ユニット名 まちな 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「あたりまえの暮らしに今日も安堵」を基本に職員一人ひとりが1年を振り返り自分たちの言葉で、実践できる理念になっている。職員、利用者、来訪者が日常的に目にするところに掲示し日々のケアに活かされている。	理念は1、その人らしく・2、つながり・3、あんどする・を掲げ、12月にケアを振り返り理念を確認している。各ユニットの目標を全員参加で見直す予定である。理念は忘れかけた時に意識し実践に繋がっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎年恒例の「夕涼み会」で地区のよさこい愛好グループや郷土芸能のおいと子保存会の方々にご披露いただき、利用者、職員、地域の方が一体となっている。地区子供会の子供みこしは毎年の訪問で利用者も楽しみにしている。	「夕涼み会」は2部制で日中は入居者・家族・孫達、夕方から近隣の方も参加し100名程集まった。春と冬の避難訓練に住民の協力があり、中学生の福祉体験学習の受け入れ、佐沼の「祭り獅子」を楽しむ等交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	日常的な散歩や外出、行事の他毎月発行の「かわら版」を配布し情報を発信することで認知症があっても普通に暮らすことを実践を通して浸透させるよう努めている。11年目を迎え利用者、職員ともに地域の一員として暮らしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は5回開催。かわら版等を通じ事業所の活動について周知を図ることで積極的な意見が交わされている。今年の敬老会では、地域の「おいとこ保存会」のメンバーから委員を通じボランティアの申込みを受けご披露いただいた。	会議は年6回開催し、包括職員の参加は1回であった。メンバーから消防避難訓練の住民参加がありテキパキと訓練していたとある。前年度の目標達成計画に続き、再度開催日時の調整や出席が望まれる。	県のガイドラインは包括職員の会議への参加は年4回以上としている。会議を平日に変更し出席案内に努力するも参加は少ない。地域づくりの為に包括職員の参加をお願いしたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事業所のケアを共に向上させたいという担当者の熱意があり、良き相談者として存在している。気兼ねなく何でも話やすく心強い。	運営推進会議に町職員又は地域包括職員の参加がないことを役場に出向いて相談し助言を頂いている。登米市事業者連絡協議会の研修会に職員が参加しており、年2回地域の方へ情報発信している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	契約書・重要事項説明書にも記載しており職員だけでなく家族にも身体拘束のないケアの実践を浸透させている。利用者の自由を妨げず安全を確保するため職員同士の声掛けなどケアの方法を工夫している。	身体拘束への弊害については、会議や研修会での社会労務士の方等から理解を深めている。今はふらっと出掛ける方も見られない。落ち着いた背景に便秘があると排便チェック表で把握しコントロールしている。日中玄関には施錠されていない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修機会を持ち理解を深め、「ヒヤリハット」を活用し利用者の些細な変化も見逃さないよう努めている。利用者の重度化に伴う職員の負担が増大しないよう職員配置にも配慮している。家族や来訪者への周知のためポスターを掲示している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	関連性のある研修会に参加し事例を通して制度や自立支援を学び理解する機会を設けている。また、毎月の会議で利用者一人ひとりの状況を全職員で確認し個々にあったサービス提供が出来るよう努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用前から契約時も含め十分な時間を割いて説明を行っている。法律の改訂に伴う変更やその他重要事項の変更など、変更前から周知を図ると共に同意を得た文書を交わしている。疑問や不安が残らないよう話しやすい体制にも留意している		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	第三者委員を苦情相談窓口を、見やすいように掲示している。入居時から苦情や相談がホームのサービスの質を向上させることを理解していただけるよう話し、入居後も職員の方から積極的に働きかけ話しやすい環境作りに努力している	訪問時・推進会議等で意見や要望を聴き大切にしている。ホームへの感謝の言葉が多く、苦情等の話は聞かれない。家族から本人を外へ連れだしたい・・の声をもらい状況を見て計画に反映させた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	各種会議はもとより面談などを通し職員の意見を聞く機会を多くしている。普段から、職員からの要望があれば意見を聞く機会を設け職員の「こうしたい、こんなことがしたい」を運営に反映している。	「100歳のお祝いにご苦労された家族へ賞状を差上げたい!」「大掃除の時は行楽弁当を買いに出かけ一緒に食べる。」等の意見が反映された。100歳の祝いに駆け付けた非番の職員に賞金が支払われた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎年必ず、代表者との雇用契約に関する面談が行われている。また、資格取得や研修参加の啓発を行い、必要な勤務時間の配慮も行っている。業務上の会議や時間外の出勤に対しても当然すべて賃金が支払われている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	「介護は入である」との方針で、各職員が息欲的に参加できる法人内外の研修を受ける機会を設けている。また、年1回、職員個々の「自己評価」を実施し管理者との面談を行っている。日常的にケアの向上を根付かせている		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	「日本認知症グループホーム協会」に加入している。市内だけでなく県北の他ホームとも交流がありまた近隣のショートステイ・デイサービスとの交流もある。登米市事業者連絡協議会に加入し全職員の研修会参加も実現している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの利用開始前には、必ず本人と会って直接話をする機会を設けている。ゆっくりと話を聴き情報収集はもちろん、安心と信頼関係を築くよう努めている。今年度の新入居者は2名。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用前には必ずホームへ来ていただき、家族の思いを受け止め信頼関係の構築に努めている。家族の思いを充分に出していただくことで、そこから見えてくる課題や本人への思いが次の段階への足がかりとなると考えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時はその置かれている状況によりサービスの利用如何を問わず改善に向けて最大限の努力をするよう心がけている。必要により地域包括支援センターや自治体その他社会資源も含め相談者の承諾を得ながら解決の支援に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人生の先輩として常に尊敬の気持ちで、一緒に生活する家族同様の関係を築いている。それぞれが持てる力を発揮できる役割を担い共に暮らしている。私たち職員にとって「大切な、大事な家族」である。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者の暮らし方や状況を積極的に伝えることで、「○○させたい」「○○に合わせたい」など本人を中心に職員と家族と一緒に支える関係を築いている。離れているからこそその家族の気持ちをくみ、思いを大切にしよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	生活の場がホームに変わっても、本人の気持ちを第一に考えこれまで通りの、友人や大切な人との関係が途切れることのない様支援している。「暮らしの継続」を大切に、本人の喜びを引き出すよう努めている。	気軽にホームに寄って戴けるよう声掛けしており、地元の友人や親戚・家族・兄弟・孫等、週2～3回の大切な人(夫)の来訪もある。また、馴染みの行楽地・スーパー・理・美容院等関係が継続できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	必要なときには職員が介入配慮しながら、会話や作業を利用者同士で楽しめるよう努めている。利用者だけでなく職員も含めた人間関係の中で支え合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後の本人や、家族に対する支援についての対応が出来る体制になっている。本人が亡くなられた後も訪問しやすいよう「夕涼み会」などの案内を送り、関係を断ち切らないよう努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ホームでどう暮らしたいかではなく、その人本人が「どう生きていきたいのか？」に目を向け、日常の何気ない会話や利用者の行動から把握するよう努めている。本人の思いは言葉だけでなくあらゆる事から表現されていると考えている。	その人の思いを汲み取れるよう支援し、ライフサポートに目を向けて取り組んでいる。娘が皆さんに！とお菓子を持ってきたが本人にどうする？と聞くとうなづいたので、意思を尊重しあげている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人はもとより家族にも暮らしの継続を大切にしていることを伝え、情報収集に努めている。また、サービス開始後もわからないことや疑問な事が出来ればその都度、本人や家族と情報交換をしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出来る事出来ない事、わかる事わからない事、習慣にあったかなど多方面から本人を理解し可能な限り本人の全体像を把握するよう努めており定期的に見直しをする体制が出来ている。率直に「暮らしに満足しているか？」伺ったりしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の意向を踏まえ、職員全員で意見を出し合い介護計画を作成し、本人又は家族とも相談の上、合意の上で計画を実践している。実践のモニタリング、見直しも同様に行っている。毎日の生活の中で必要と思われることは都度ケアの中に取り入れて	本人・家族の意見を聞いて担当者がまとめ、チーム会議で検討し全体会議に図りプランを作成し、家族に渡している。プランの見直しやモニタリングは3ヶ月毎に行い、変化がなければ年1回家族と面談し同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画・実践・結果・見直しが効果的に活用できるような記録用紙となっている。また、毎日の記録は出来るだけ本人の言葉をそのまま記載し、申し送りや連絡ノートなどを活用して情報の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所で出来ることは、これとこれですというのではなく、ひとりひとりのニーズによって利用者の側に立って考え可能な限りサービスを提供できるよう人員の配置や充足など柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	出来る限り本人の持っている力を発揮していただくよう心掛けている。地域の方々はもちろん、行きつけの商店など利用者が足を運ぶところは、ホームの活動に理解を深めており協力に感謝している。皆さん笑顔で接して下さっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関だけでなく本人や家族の希望する医療機関の受診や、訪問診療など必要な支援を行っている。必要なときには職員が同行し利用者を支えている。	協力医がかかりつけ医である。受診は看護師である管理者が付添い適切に情報伝達し結果は双方で共有している。必要時には2名の医師(主に内科)の往診と歯科医の往診もあり、安心出来る医療連携で支えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職員に看護師を配置し24時間いつでも対応可能となっている。利用者の小さな変化も常に報告し必要な支援を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院による利用者のダメージを最小限に食い止めるよう医療機関はもとより家族との連携を密にし早期退院に向け支援している。入院時より退院に向けた話し合いをし医療機関と協力している。こうした積み重ねにより入院の受け入れ病院も複数あり、受		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「看取りに関する指針」を整備している。終末期はその時々で、本人・家族に気持ちの変動があることも踏まえ細やかな対応を心がけてどういったケアが出来るかを話し合い悔いのない生活をしていただくため、医師の協力を得ながら支援を尽くしている。	在宅をサポートし馴染みの職員と生活を共にし、その延長線上に看取りがあるとして早期から「看取りに関する指針」を家族に説明し同意を得ている。入居者の介護度も高く重度化しており「今の思いに伝えること」に視点を置き悔いのないケアを実践している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入社時研修はもとより、毎年定期的に救命法の指導を消防署職員の指導の元行っている。緊急時の対応についてマニュアルを整備し全ての職員が対応できるように研修を行い実践できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防者立会の訓練を年2回(夜間想定)実施し、その他毎月緊急通報や避難訓練を行っている。地震発生時の緊急出動規程があり、非常用の飲料水・食糧の確保、雨水利用の貯水(トイレ用など)もあり。スプリンクラー・自動火災通報装置を設置。	防災点検・避難経路・備蓄の確保等定期で行っている。住民の参加があり見守りをお願いしている。地域の防災訓練にも参加している。備蓄は普通食・流動食共7日分確保している。12月にはAEDが設置される。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ひとりの個人、人生の先輩として尊重し、声掛けやケアを行うときも配慮し実践している。その人の、その時の思いを大切にすることを職員に周知徹底している。	本人に呼び方を伺い下の名前で「～さん」と呼んでいる。トイレ支援や失禁時の対応等はさりげない言葉掛けで誘導している。居室の入出は大きな声で名前を呼び確認し、記録物は食後の昼寝の時間帯に記している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の思いに共感し、ひとりひとりの能力にあった対応を心がけ自分で決めること「自立」の重要性を認識している。サービスの中心にいるのは常に利用者であることを入社時より繰り返し浸透を図っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	たとえどんなに重度化しても、ひとりひとり本人のペースを尊重し、必要なら人員の補充や勤務時間の変更など柔軟に対応でき本人の希望に添った生活を送れるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が自分で決められるよう、その人の能力にあった支援の方法を行っている。美容院に出掛けたり、好きな服を買いに出掛けたりしている。重度化しても「この人ならこんな風にしたいはず」のその思いを形にして支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日の食事メニューを記入しながら「今日は何か？」と季節の料理や郷土料理に花を咲かせて楽しく食事の準備をされている。誕生日や行事の度に希望を反映したメニューが提供できるよう頃からの会話などでくみ取っている。出来ることはどんな些細なことでも本人の好みや食習慣に応じて、メニューを変更したり食事や水分を把握することで捕食や水分摂取を無理なく行うよう支援している。食事摂取能力の低下に合わせて調理形態も調整している。食事水分チェック表があり確認ができる。	月曜日は希望メニューとし入居者が選んだ食材が食卓に並ぶ。職員が献立を作り管理栄養士の助言もある。ペースト状や刻み食等職員のさりげないサポートで支援しゆっくり食していた。おしぼりたたみを手伝っていた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	本人の好みや食習慣に応じて、メニューを変更したり食事や水分を把握することで捕食や水分摂取を無理なく行うよう支援している。食事摂取能力の低下に合わせて調理形態も調整している。食事水分チェック表があり確認ができる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの重要性を職員が理解しており、ひとりひとりにあった支援を行っている。強制ではなくその人の習慣や能力を踏まえて気持ちに配慮したケアとなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ひとりひとりの排泄習慣やパターンを把握し、個々に対応している。使用するオムツやパットも吸収量やサイズなど個人にあった物を使い分けて、経済面にも配慮している	「必要な介護と留意事項」を入居時から作成し10項目からなる必要な介護として把握し、自立支援を促している。排泄表やその人のシグナルをキャッチし、手を腰にする人、さつと立つ人など、トイレに誘導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	1日の食事や水分摂取量を把握し、運動もひとりひとりにあった方法で行い、便秘の予防に努めている。また、入浴時など腹部マッサージを行うなどして自然な排便を促している。食材も繊維質など積極的に取り入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日の入浴が可能である。気分良く入浴できるように入浴前の声掛けや対応などに配慮したり、入浴剤や菖蒲湯・ゆず湯など楽しんでいただくよう支援している。介助中も会話をしリラックスして入浴できるよう心掛けている。	入浴時間は午前が介助の方で、午後は自立の方が多。肌の弱い方や夕方希望の方もいる。拒む方には、浴槽の様子を見て貰い入浴を促し、本人の脱ぐのを待って支援に繋がっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動などを通じ1日の生活リズムをつくるよう心がけている。睡眠チェック表を使い体面も考慮し、日中の仮眠や休息の時間を促している。また、寝具や気温、湿度、部屋の明るさ、音など良い睡眠のためにそれぞれに対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ひとりひとりにあった支援を行っている。症状の変化や確認など主治医との連携を密にしながらその都度対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ひとりひとりの能力にあつた役割活動を通して力を発揮していただいている。一つでも何かできること、出来ることの喜びを感じていただけることの大切さを認識している。また、職員の心からの感謝の気持ちをきちんと伝えるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	お花見、夏祭り、紅葉ドライブなど季節を感じられる外出や食材の買い出し、日用品の購入など生活していればあたりまえの外出などを支援している。また、本人の希望があれば希望に添った外出が出来る体制を取っている。	天気の良い日はホーム周辺を散歩し買物等に出掛け、車椅子の方や寝たきりの方もリクライニング車で出掛けて気分転換している。その時々状況に合わせて支援し、外食だったり・初詣・花見・七夕・紅葉・イルミネーション等楽しみの共有に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	生活していく上でなくてはならないのがお金。管理は出来なくても家族の協力も得て、自分で持っている方もいる。なくしたら心配、なくても心配が生きる力を強化していると感じる。自分のお金で欲しいものを買う喜びを大切に支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	季節の挨拶や贈り物へのお礼状などその時の思いをすぐに手紙や電話で伝えられるよう支援している。話したくても言葉で伝えることが困難な方、文字を書きたくても困難な方とひとりひとり本人の力に応じて職員が手伝いながら支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には長椅子を設置し洗濯干しや外出の歳のちょっとした憩いの場になっている。ホールには季節感が味わえるよう一緒に手作りした物や書道の作品、思い出の写真など掲示している。温度や湿度は季節感が損なわれないよう配慮している。	床暖と加湿器、天窓の採光で明るく心地いい。朝の清掃で換気を行い臭気や空気の淀みは感じない。壁には紅葉で季節感を出している。居室入口には入居者の写真や小物を飾っている。100歳を迎えた方が車いすで凛としていた。温かい共用空間である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	広いホールをテーブル席、ソファ、掘りごたつの畳スペースと高さを変えることで視線を避け、ゆっくりくつろげるようにしている。和室に座椅子を用意しくつろぎながらテレビを観られている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居当初から「自分の部屋ごと引越してきてください」と家族にも協力をいただき、使い慣れた自分の物に囲まれて暮らしている。一つ一つの物に思いでも詰まっていると考え大事にしている。家族とともに購入した品物を置き換えては楽しんでいる。	ホームの備え付けは防災カーテン・照明・クローゼット・温風ヒーター・加湿器等である。使い慣れた身の回りの品や仏壇に毎日ご飯をあげて落ち着かれる等、想い思いに過ごせる居室づくりに工夫されてる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ひとりひとりの出来ること、わかることを把握しており安全に配慮しながら、自分で出来ることを可能な限り行ってもらっている。万が一の時にはすぐに対応できるよう気を配りながら職員が見守をさりげなく行っている。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0471200311		
法人名	有限会社 クラスタ		
事業所名	グループホームあんど	ユニット名	そあれ
所在地	宮城県登米市迫町佐沼大網229-3		
自己評価作成日	平成 25年 10月 20日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://yell.hello-net.info/kouhyou/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成 25 年 11月 20 日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「介護は人である」との運営者の思いで、職員の人柄に重きを置いて人材育成に取り組んできた。開設から12年目を迎え、最後までその人らしくを大切にし暖かく思いやりのある介護を実践するために努力している。また、地域にとって必要な事業所となれるよう広報誌などを通じ活動内容を発信したり地域の方が集う「夕涼み会」や避難訓練などを定期的に開催し、事業内容だけでなく職員、利用者とも関わりを深めてきた。まだまだ地域の方の力をお借りすることの方が多けれどお互いに支え合える関係になれるよう努めていきたい。またそのことが認知症に対する理解を深め、認知症になってもあたりまえに暮らしていける社会の礎になると考える。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「グループホーム あんど」は、合同庁舎などが近くにあり迫町の中心に位置している。事業所の理念「一人ひとりがその人らしく、家族や地域とつながりを持ち、楽しい食事にあんどする」を掲げ実践している。管理者は看護師の経験を活かし、当初から「必要な介護と留意事項」を作成し、意思疎通の方法や介護方法・自立状況を把握し、入居者への自立支援を率先して行っている。12年目を迎え入居者の介護度も進む中で、職員育成の充実、医療面の充実を図り看取りの経験を活かして「今の思いに応えること」に視点を置き悔いのないケアに努めている。事業所が「安堵の場」であり続ける為に管理者、職員は一体となり取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 あんど)「ユニット名 そあれ 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「あたりまえの暮らしに今日も安堵」を基本に職員一人ひとりが1年を振り返り自分たちの言葉で、実践できる理念になっている。職員、利用者、来訪者が日常的に目にするところに掲示し日々のケアに活かされている。	理念は1、その人らしく・2、つながり・3、あんどする・を掲げ、12月にケアを振り返り理念を確認している。各ユニットの目標を全員参加で見直す予定である。理念は忘れかけた時に意識し実践に繋がっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎年恒例の「夕涼み会」で地区のよさこい愛好グループや郷土芸能のおいと子保存会の方々にご披露いただき、利用者、職員、地域の方が一体となっている。地区子供会の子供みこしは毎年の訪問で利用者も楽しみにしている。	「夕涼み会」は2部制で日中は入居者・家族・孫達、夕方から近隣の方も参加し100名程集まった。春と冬の避難訓練に住民の協力があり、中学生の福祉体験学習の受け入れ、佐沼の「祭り獅子」を楽しむ等交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	日常的な散歩や外出、行事の他毎月発行の「かわら版」を配布し情報を発信することで認知症があっても普通に暮らすことを実践を通して浸透させるよう努めている。11年目を迎え利用者、職員ともに地域の一員として暮らしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は5回開催。かわら版等を通じ事業所の活動について周知を図ることで積極的な意見が交わされている。今年の敬老会では、地域の「おいとこ保存会」のメンバーから委員を通じボランティアの申込みを受けご披露いただいた。	会議は年6回開催し、包括職員の参加は1回であった。メンバーから消防避難訓練の住民参加がありテキパキと訓練していたとある。前年度の目標達成計画に続き、再度開催日時の調整や出席が望まれる。	県のガイドラインは包括職員の会議への参加は年4回以上としている。会議を平日に変更し出席案内に努力するも参加は少ない。地域づくりの為に包括職員の参加をお願いしたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事業所のケアを共に向上させたいという担当者の熱意があり、良き相談者として存在している。気兼ねなく何でも話やすく心強い。	運営推進会議に町職員又は地域包括職員の参加がないことを役場に出向いて相談し助言を頂いている。登米市事業者連絡協議会の研修会に職員が参加しており、年2回地域の方へ情報発信している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	契約書・重要事項説明書にも記載しており職員だけでなく家族にも身体拘束のないケアの実践を浸透させている。利用者の自由を妨げず安全を確保するため職員同士の声掛けなどケアの方法を工夫している。	身体拘束への弊害については、会議や研修会での社会労務士の方等から理解を深めている。今はふらっと出掛ける方も見られない。落ち着いた背景に便秘があると排便チェック表で把握しコントロールしている。日中玄関には施錠されていない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修機会を持ち理解を深め、「ヒヤリハット」を活用し利用者の些細な変化も見逃さないよう努めている。利用者の重度化に伴う職員の負担が増大しないよう職員配置にも配慮している。家族や来訪者への周知のためポスターを掲示している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	関連性のある研修会に参加し事例を通して制度や自立支援を学び理解する機会を設けている。また、毎月の会議で利用者一人ひとりの状況を全職員で確認し個々にあったサービス提供が出来るよう努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用前から契約時も含め十分な時間を割いて説明を行っている。法律の改訂に伴う変更やその他重要事項の変更など、変更前から周知を図ると共に同意を得た文書を交わしている。疑問や不安が残らないよう話しやすい体制にも留意している		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	第三者委員を苦情相談窓口を、見やすいように掲示している。入居時から苦情や相談がホームのサービスの質を向上させることを理解していただけるよう話し、入居後も職員の方から積極的に働きかけ話しやすい環境作りに努力している	訪問時・推進会議等で意見や要望を聴き大切にしている。ホームへの感謝の言葉が多く、苦情等の話は聞かれない。家族から本人を外へ連れだしたい・・・の声をもらい状況を見て計画に反映させた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	各種会議はもとより面談などを通じ職員の意見を聞く機会を多くしている。利用者に関することはもちろん行事等に関することも全職員で話し合う機会を設けている。職員の「こうしたい、こんなことがしたい」意見を大切にしている	「100歳のお祝いにご苦労された家族へ賞状を差上げたい!」「大掃除の時は行楽弁当を買いに出かけ一緒に食べる。」等の意見が反映された。100歳の祝いに駆け付けた非番の職員に賞金が支払われた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎年必ず、代表者との雇用契約に関する面談が行われている。また、職員一人ひとりの声を吸い上げやりがいのある職場づくりに努めている。業務上の会議や時間外の出勤に対しても当然すべて賃金が支払われている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	「介護は入である」との方針で、各職員が意欲的に参加できる法人内外の研修を受ける機会を設け自己研鑽の意識を高めるよう努めている。また、年1回、職員個々の「自己評価」を実施し管理者との面談においてケア向上に活かされている		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	「日本認知症グループホーム協会」に加入している。市内だけでなく県北の他ホームとも交流がありまた近隣のショートステイ・デイサービスとの交流もある。登米市事業者連絡協議会に加入し全職員の研修会参加も実現している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの利用開始前には、必ず本人と会って直接話をする機会を設けている。ゆっくりと話を聴き情報収集はもちろん、安心と信頼関係を築くよう努めている。今年度の新入居者は2名。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用前には必ずホームへ来ていただき、家族の思いを受け止め信頼関係の構築に努めている。家族の思いを充分に出していただくことで、そこから見えてくる課題や本人への思いが次の段階への足がかりとなると考えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時はその置かれている状況によりサービスの利用如何を問わず改善に向けて最大限の努力をするよう心がけている。必要により地域包括支援センターや自治体その他社会資源も含め相談者の承諾を得ながら解決の支援に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人生の先輩として常に尊敬の気持ちで、一緒に生活する家族同様の関係を築いている。それぞれが持てる力を発揮できる役割を担い共に暮らしている。私たち職員にとって「大切な、大事な家族」である。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者の暮らしぶりや状況を積極的に伝えることで、「○○させたい」「○○に合わせたい」など本人を中心に職員と家族が一緒に支える関係を築いている。離れているからこそその家族の気持ちをくみ、思いを大切にしよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	生活の場がホームに変わっても、本人の気持ちを第一に考えこれまで通りの、友人や大切な人との関係が途切れることのない様支援している。「暮らしの継続」を大切に、本人の喜びを引き出すよう努めている。	気軽にホームに寄って戴けるよう声掛けしており、地元の友人や親戚・家族・兄弟・孫等、週2～3回の大切な人(夫)の来訪もある。また、馴染みの行楽地・スーパー・理・美容院等関係が継続できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	必要なときには職員が介入配慮しながら、会話や作業を利用者同士で楽しめるよう努めている。利用者だけでなく職員も含めた人間関係の中で支え合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後の本人や、家族に対する支援についての対応が出来る体制になっている。本人が亡くなられた後も訪問しやすいよう「夕涼み会」などの案内を送り、関係を断ち切らないよう努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ホームでどう暮らしたいかではなく、その人本人が「どう生きていきたいのか？」に目を向け、日常の何気ない会話や利用者の行動から把握するよう努めている。本人の思いは言葉だけでなくあらゆる事から表現されていると考えている。	その人の思いを汲み取れるよう支援し、ライフサポートに目を向けて取り組んでいる。娘が皆さんに！とお菓子を持ってきたが本人にどうする？と聞くとうなづいたので、意思を尊重しあげている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人はもとより家族にも暮らしの継続を大切にしていることを伝え、情報収集に努めている。また、サービス開始後もわからないことや疑問な事が出来ればその都度、本人や家族と情報交換をしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出来る事出来ない事、わかる事わからない事、習慣にあったかなど多方面から本人を理解し可能な限り本人の全体像を把握するよう努めており定期的に見直しをする体制が出来ている。率直に「暮らしに満足しているか？」伺ったりしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の意向を踏まえ、職員全員で意見を出し合い介護計画を作成し、本人又は家族とも相談の上、合意の上で計画を実践している。実践のモニタリング、見直しも同様に行っている。毎日の生活の中で必要と思われることは都度ケアの中に取り入れて	本人・家族の意見を聞いて担当者がまとめ、チーム会議で検討し全体会議に図りプランを作成し、家族に渡している。プランの見直しやモニタリングは3ヶ月毎に行い、変化がなければ年1回家族と面談し同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画・実践・結果・見直しが効果的に活用できるような記録用紙となっている。また、毎日の記録は出来るだけ本人の言葉をそのまま記載し、申し送りや連絡ノートなどを活用して情報の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所で出来ることは、これとこれですというのではなく、ひとりひとりのニーズによって利用者の側に立って考え可能な限りサービスを提供できるよう人員の配置や充足など柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	出来る限り本人の持っている力を発揮していただくよう心掛けている。地域の方々はもちろん、行きつけの商店など利用者が足を運ぶところは、ホームの活動に理解を深めており協力に感謝している。皆さん笑顔で接して下さっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関だけでなく本人や家族の希望する医療機関の受診や、訪問診療など必要な支援を行っている。必要なときには職員が同行し利用者を支えている。	協力医がかかりつけ医である。受診は看護師である管理者が付添い適切に情報伝達し結果は双方で共有している。必要時には2名の医師(主に内科)の往診と歯科医の往診もあり、安心出来る医療連携で支えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職員に看護師を配置し24時間いつでも対応可能となっている。利用者の小さな変化も常に報告し必要な支援を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院による利用者のダメージを最小限に食い止めるよう医療機関はもとより家族との連携を密にし早期退院に向け支援している。入院時より退院に向けた話し合いをし医療機関と協力している。こうした積み重ねにより入院の受け入れ病院も複数あり、受		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「看取りに関する指針」を整備している。終末期はその時々で、本人・家族に気持ちの変動があることも踏まえ細やかな対応を心がけてどういったケアが出来るかを話し合い悔いのない生活をしていただくため、医師の協力を得ながら支援を尽くしている。	在宅をサポートし馴染みの職員と生活を共にし、その延長線上に看取りがあるとして早期から「看取りに関する指針」を家族に説明し同意を得ている。入居者の介護度も高く重度化しており「今の思いに伝えること」に視点を置き悔いのないケアを実践している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入社時研修はもとより、毎年定期的に救急救命法の指導を消防署職員の指導の元行っている。緊急時の対応についてマニュアルを整備し全ての職員が対応できるように研修を行い実践できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防者立会の訓練を年2回(夜間想定)実施し、内1回は地域住民参加で行っている。地震発生時の緊急出動規程があり、非常用の飲料水・食糧の確保、雨水利用の貯水(トイレ用など)もあり。スプリンクラー・自動火災通報装置を設置。	防災点検・避難経路・備蓄の確保等定期で行っている。住民の参加があり見守りをお願いしている。地域の防災訓練にも参加している。備蓄は普通食・流動食共7日分確保している。12月にはAEDが設置される。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ひとりの個人、人生の先輩として尊重し、声掛けやケアを行うときも配慮し実践している。その人の、その時の思いを大切にすることを心掛けている。	本人に呼び方を伺い下の名前で「～さん」と呼んでいる。トイレ支援や失禁時の対応等はさりげない言葉掛けで誘導している。居室の出入は大きな声で名前を呼び確認し、記録物は食後の昼寝の時間帯に記している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の思いに共感し、ひとりひとりの能力にあった対応を心がけ自分で決めること「自立」の重要性を認識している。サービスの中心にいるのは常に利用者であることを入社時より繰り返し浸透を図っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	たとえどんなに重度化しても、ひとりひとり本人のペースを尊重し、必要なら人員の補充や勤務時間の変更など柔軟に対応でき本人の希望に添った生活を送れるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が自分で決められるよう、その人の能力にあった支援の方法を行っている。美容院に出掛けたり、好きな服を買いに出掛けたりしている。白髪を染めたい方の「いつもきれいにしたい」その思いを支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	その日食べたいものを一緒に買いに出掛け提供したり、季節の食材を取り入れたメニューを提供している。芋煮会ではホームの畑で採れた枝豆を利用者にもいでいただき、すぐにゆでて「美味しいね」と楽しく食した。	月曜日は希望メニューとし入居者が選んだ食材が食卓に並ぶ。職員が献立を作り管理栄養士の助言もある。ペースト状や刻み食等職員のさりげないサポートで支援しゆっくり食していた。おしぼりたたみを手伝っていた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	本人の好みや食習慣に応じて、メニューを変更したり食事や水分を把握することで捕食や水分摂取を無理なく行うよう支援している。食事摂取能力の低下に合わせて調理形態も調整している。食事水分チェック表があり確認ができる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの重要性を職員が理解しており、ひとりひとりにあった支援を行っている。強制ではなくその人の習慣や能力を踏まえて気持ちに配慮したケアとなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ひとりひとりの排泄習慣やパターンを把握し、個々に対応している。日中・夜間で尿量も変わってくるので使用するオムツやパットも吸収量やサイズなど個人にあった物を使い分けて、経済面にも配慮している	「必要な介護と留意事項」を入居時から作成し10項目からなる必要な介護として把握し、自立支援を促している。排泄表やその人のシグナルをキャッチし、手を腰にする人、さつと立つ人など、トイレに誘導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	1日の食事や水分摂取量を把握し、運動もひとりひとりにあった方法で行い、便秘の予防に努めている。また、入浴時など腹部マッサージを行うなどして自然な排便を促している。食材も繊維質など積極的に取り入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日の入浴が可能である。気分良く入浴できるようにその人にあった対応などに配慮したり、入浴剤や菖蒲湯・ゆず湯など楽しんでいただくよう支援している。入浴を拒む方は時間をおいての声掛けや言葉掛けの工夫をし安心して入浴できるよう支援している。	入浴時間は午前が介助の方で、午後は自立の方が多。肌の弱い方や夕方希望の方もいる。拒む方には、浴槽の様子を見て貰い入浴を促し、本人の脱ぐのを待って支援に繋がっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	毎日の活動などを通して日々の生活リズムをつくるよう心がけている。睡眠チェック表を使い体面も考慮し、日中の仮眠や休息の時間を促している。また、寝具や気温、湿度、部屋の明るさ、音など良い睡眠のためにそれぞれに対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ひとりひとりにあった支援を行っている。症状の変化や確認など主治医との連携を密にしながらその都度対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ひとりひとりの能力にあつた役割活動を通して力を発揮していただいている。一つでも何かできること、出来ることの喜びを感じていただけることの大切さを認識している。また、職員の心からの感謝の気持ちをきちんと伝えるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近くのショートステイから寝台車両も借りられ、寝たきりでも、車椅子でも出掛けられる。日常的に事業所内だけで過ごすことがないよう支援を心がけている。散歩や買い物、外食や行事などいきたい場所があれば実現できるよう支援している。	天気の良い日はホーム周辺を散歩し買物等に出掛け、車椅子の方や寝たきりの方もリクライニング車で出掛けて気分転換している。その時々状況に合わせて支援し、外食だったり・初詣・花見・七夕・紅葉・イルミネーション等楽しみの共有に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	生活していく上でなくてはならないのがお金。管理は出来なくても家族の協力も得て、自分で持っている方もいる。なくしたら心配、なくても心配が生きる力を強化していると感じる。自分のお金で欲しいものを買う喜びを大切に支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	季節の挨拶や贈り物へのお礼状などその時の思いをすぐに手紙や電話で伝えられるよう支援している。話したくても言葉で伝えることが困難な方、文字を書きたくても困難な方とひとりひとり本人の力に応じて職員が手伝いながら支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を味わえるよう四季それぞれに手作りの飾りをしたり、思い出の写真や掲示物、季節の植物など日常に目を触れる物に配慮している。窓から見える景色も四季それぞれの花など楽しみとなっている。夏にはすだれなど利用し温度や湿度も季節感を大事に調整している。	床暖と加湿器、天窓の採光で明るく心地いい。朝の清掃で換気を行い臭気や空気の淀みは感じない。壁には紅葉で季節感を出している。居室入口には入居者の写真や小物を飾っている。100歳を迎えた方が車いすです凍としていた。温かい共用空間である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	礼拝堂のホールを活かして視線を避ける事が出来るよう配慮している。また、和室スペースがありくつろげるようになっている。居室から出てくるとホールのテーブルが見え話をするために出てこられたり自然に集まったりと気分が過ごせるようになってい		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	大店当初から「自分の部屋ごと引越してきてください」と家族にも協力をいただき、使い慣れた自分の物に思い出と共に囲まれて暮らしている。歩行が難しくなってきた利用者には家具のレイアウト等で自由に居室内で過ごせるようになっている。	ホームの備え付けは防災カーテン・照明・クローゼット・温風ヒーター・加湿器等である。使い慣れた身の回りの品や仏壇に毎日ご飯をあげて落ち着かれる等、思い思いに過ごせる居室づくりに工夫されてる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ひとりひとりの出来ること、わかることを把握しており安全に配慮しながら、自分で出来ることを可能な限り行ってもらっている。万が一の時にはすぐに対応できるよう気を配りながら職員が見守をさりげなく行っている。		